

ビジネス総合学科におけるゼミナール教育の実践報告 — 社会人基礎力の向上にむけて —

村越 純子

1. はじめに

経済産業省は2006年に、今日一般的となった「社会人基礎力」をキャリア教育の指針として発表した¹。大学生が卒業までに身につけるべき能力、すなわち社会人として求められる「社会人基礎力」を、「前に踏み出す力 (Action)」、「考え抜く力 (Thinking)」と「チームで働く力 (Team Work)」の「3つの能力」からなるとした。さらに「前に踏み出す力 (Action)」は「主体性」、「働きかけ力」と「実行力」に、「考え抜く力 (Thinking)」は「課題発見力」、「計画力」と「創造力」に、「チームで働く力 (Team Work)」は「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」と「ストレスコントロール力」に分けられ、合計した数が12なので「12の能力要素」と称された²。

このように規定された「社会人基礎力」は2017年、新たに「人生100年時代の社会人基礎力」(Essential competencies for the 100-year life)と定義しなおされ、「学び (何を学ぶか)」、「統合 (どのように学ぶか)」、「目的 (学んだ後に、どのように活躍するか)」という3つの視点が追加された。そして、能力間のバランスを図ることが、自らのキャリアを切りひらいていく上で重要とされた³。

城西短期大学ビジネス総合学科は、「社会人基礎力」を構成する「前に踏み出す力 (Action)」、「考え抜く力 (Thinking)」、「チームで働く力 (Team Work)」の3つの力をバランスよく向上させることをめざしている。具体的に説明するとつぎのとおりである。本学ビジネス総合学科のディプロマ・ポリシー (学位授与の方針) では、「自立した社会人として求められる人間力」を身につけた成果を基本的学習成果と呼び、「職業人として活躍できる幅広い教養と、英語、情報、メディア、会計、販売・接客、事務処理等のビジネススキル」の習得結果を専門的学習成果と定めている⁴。基本的学習成果としての「人間力」は「①前に踏み出す力、②考える力、③協力する力」から構成されると説明されており、これはまさしく「社会人基礎力」(Essential competencies) のことである。このように本学では、人間形成における「社会人基礎力」の向上を中核的な目標とし、職業人としての専門的能力を高めていくことがめざされている。

本学の「人間力」、つまり「社会人基礎力」向上を主たる目的とする科目が1、2年次それぞれに配置されているゼミナール科目である。1年次前期の「基礎ゼミナールA」では自己肯定感を高めるとともに、自らの感性や理性を言語化できるようにすることをとおして「前に踏み

出す力 (Action)」を養う。より「主体性」を持てるようになり、養われる「働きかけ力」と「実行力」を前提として1年次後期の「基礎ゼミナールB」では、課題解決のために「考え抜く力 (Thinking)」の向上をめざす。2年次前期の「ゼミナールA」では1年次に獲得あるいは向上させた力を前提として、「チームで働く力 (Team Work)」を高め、2年次後期の「ゼミナールB」では、それまでに高めた「前に踏み出す力」、「考え抜く力」と「チームで働く力」の3つの能力による総合的実践を行う。このような「社会人基礎力」の向上をめざすプログラムにより2年間のゼミナール教育が実施されている。

2020年度前期における「基礎ゼミナールA」は新型コロナウイルス感染症拡大にともない、授業の実施方式は対面方式からオンライン方式に変更された。オンライン方式のもとで実施された「基礎ゼミナールA」の教育実践については、拙稿「オンライン授業における『基礎ゼミナールA』の教育実践報告」(『城西短期大学紀要』第38巻第1号所収)にまとめた。そこでは、MS-Teamsによるオンライン面談やチャット機能による受講生との対話方法は、これからの時代の新たなコミュニケーション・ツールとして有効であることを指摘した。言い換えれば、オンライン授業に対応するために取り組んだ結果、見いだされたことは、対面方式の授業にも応用できるのではないかということであった。

本稿では、2020年度における1年次後期の「基礎ゼミナールB」、2021年度における2年次前期の「ゼミナールA」と2年次後期の「ゼミナールB」の教育内容を報告する。これら3つのゼミナールの受講生は同一なので、ゼミナール教育による学習成果を確認できる。教育内容を報告した上で、1年次11月と2年次1月の2回実施された日経 Human Resources (HR) の「社会人基礎力診断S」の診断結果を比較検討する。さらに、実施されたアンケートの結果について検討する。最後に、本稿をまとめ今後の課題を述べる。

2. 「基礎ゼミナールB」における教育実践：「考え抜く力」の向上をめざす

(1) 授業目標

1年次前期の「基礎ゼミナールA」では、教員が指定した教科書である、諸富祥彦著『働く意味』がわからない君へービクトール・フランクルが教えてくれる大切なこと』(日本実業出版社、2014年)を用いた。同書は全48のトピックから構成されており、各トピックでは生き方についての悩みや疑問に対して、著者である諸富氏が、『夜と霧』を執筆した心理学者のビクトール・フランクルの考え方を紹介しながら回答するという形式をとっている。この文献のトピックに基づいて自分の体験・経験を語ってもらい、それらを肯定的に意味づけることによって、「前に踏み出す力 (Action)」を高めることをめざした。受講生が自身の体験・経験を他者に伝え、それらについて聴講者全員からコメントが得られることで、受講生が自身の体験・経験をいっそう肯定的にとらえ、自己肯定感を高めることができれば、結果として「前に踏み出す力

(Action)」を高めることにつながると考えたのである。

「基礎ゼミナールA」をうけて、1年次後期の「基礎ゼミナールB」では、「考え抜く力(Thinking)」の向上をめざした。対象を社会ではなく個々人当事者とし、解決すべき課題を発見するという「課題発見力」、課題解決のための「計画力」と「創造力」を高めるためにつぎのようなプロセスを想定した。

自分の置かれた状況を客観的に見る力(自身の体験・経験の相対化)、そこから自らの解決すべき課題を発見(「課題発見力」)し、課題を解決する手助けをする文献を探し、探した文献を読んで理解し、内容を組み合わせて問題解決の手がかりを得ることを目指す。あわせて他者の報告を視聴しこれらから新たな発想等を吸収する。これら一連の流れによって身につけられる力を「計画力・創造力」とみなした。「基礎ゼミナールB」では、「基礎ゼミナールA」でめざした「前に踏み出す力」の向上を前提として、「考え抜く力」を向上させることを授業の目標とした。

(2) 授業の導入および学習支援の方法

受講生が選択する文献についての相談はMS-Teamsチャットを用いておこなうこととした。教員とのディスカッションのなかで、自らの課題を明確にさせ、課題解決のための文献を選択させた。報告に関する授業準備としては、授業開始(9月25日)前にオンライン事前(プレ)授業を2回実施した。1回目(8月21日)のプレ授業と2回目(9月4日)のプレ授業(いずれもオンライン授業)では、昨年度の本科目受講生に、2019年度授業時に報告した資料に基づいてプレゼンテーションの手本を示してもらった。当該学生は受講生のなかでもとくに優れた報告をおこなった者である。「手本」を示すことで、1人25分程度の持ち時間で十分な内容の報告ができることを理解させた。また報告内容に対して全員にコメントさせ、自らの報告やその報告に対する反応をイメージできるように配慮した。そのうえで授業の目標、授業方法そして報告手順(準備のプロセス)を説明した。具体的には以下のとおりである。

各自の報告時間は20分以上30分以内、聴覚資料となる読み原稿(MS-Word形式)については1分200字で話す想定して4000字以上を作文すること、視覚資料となるパワーポイント原稿(MS-Power Point形式)については24シート程度で作成すること、などである。そのうえで、受講生に報告予定の読み原稿とパワーポイント原稿をできるだけ報告予定日の2週間前までに作成して、教員(筆者)の大学メールアドレス宛に送信することとした。報告日以前の提出については、受講生の完成度に応じて助言したり、場合によっては添削したりする時間が必要であるからと説明した。そして完成した読み原稿およびパワーポイント原稿は教員側でPDFファイルに変換して、報告日以前にMS-Teamsの「学生の報告資料」フォルダにアップロードすることを伝えた。また報告に対しては、全員がコメントすることをもとめた。

第1回授業（9月25日）ではまず、各自の課題解決のために選択した文献についてその選択理由を簡単に説明してもらい、報告予定日を相談して決めた。第2回授業（10月2日）から順次、受講生に報告してもらった。新型コロナウイルス感染症対策として、報告者の希望によって前期の「基礎ゼミナールA」同様にオンラインで報告することも認めた。

「基礎ゼミナールA」で行ったオンライン環境を活かした授業時間外における学習支援、つまり報告資料の共有や発表準備のプロセスを「見える化」する取り組みは「基礎ゼミナールB」においても続けた。具体的には、筆者が報告水準に到達したと判断したプレゼンテーション原稿（MS-Power Point形式）を、順次A4サイズ用紙（縦方向）に2シート（縦）形式のPDFファイルに変換してMS-Teamsに作った「学生の報告資料」フォルダにアップロードし、そのことを受講生全員に一齐通知した。原稿は受講生全員で共有できるので、それらを参考に自らの報告準備ができるようにした。そして受講生が報告するまでの準備、すなわち授業の予習のなかで生じた問題には、記録されるMS-Teamsのチャット機能や学内メールを用いて答え、作成された原稿には添削をするという学習支援をおこなった。

（3）授業内容

表1は実施された授業日程と受講生が取り上げた文献名をまとめたものである。報告者の名前は個人情報であるため番号で示している。受講生が課題解決の手がかりを得るために選択した文献の多くは、人間関係づくりに必要なコミュニケーションに関するものが多かった。受講生の半数が報告予定日のかなり前から報告準備に取りかかり、1週間以上前には報告準備を終えていた。このため、報告予定日にはほぼ全員がパワーポイント原稿を教室のスクリーンに表示し、持ち時間（25分程度）を十分に使って報告することができていた。

受講生は自らが選択した文献のなかでいくつかの節を選択してその概要を説明したうえで、文献のトピックに関連する自分の体験・経験を言語化して、それらがもつ意味を見いだしていた。自らの体験・経験等の具体的な事例を挙げつつ、文献内容を報告することによって、課題解決のための自らの考えを深化させようとしていた。また、視覚資料について言えば、それぞれの受講生は写真、イラストやアニメーションを取り入れてわかりやすい説明を付けるなど、表現を工夫していた。また、報告に対しては毎回出席者全員が他のコメントと重複しないように意識しながら自分らしいコメントができるようになっていた。

表1 「基礎ゼミナールB」の授業日程

授業回	授業日	授業内容	
プレ1	8月21日	村越ゼミ2年生によるプレゼンの実演とそれに対する各自のコメント演習	
プレ2	9月4日	村越ゼミ2年生によるプレゼンの実演とそれに対する各自のコメント演習	
1	9月25日	近況報告と選択した文献名の確認	
		報告者	報告した文献
2	10月2日	①	伊庭正康『できるリーダーは、「これ」しかやらない—メンバーが自ら動き出す「任せ方」のコツ』PHP 研究所、2019年。
		②	岸見一郎・古賀史健『嫌われる勇気—自己啓発の源流「アドラー」の教え』ダイヤモンド社、2013年。
3	10月9日	③	ケラー・マクゴニガル『スタンフォードの心理学講義—人生がうまくいくシンプルなルール』日本経済新聞出版、2020年。
		④	樋口裕一『「頭がいい」の正体は読解力』幻冬舎新書、2019年。
4	10月16日	⑤	ジェリー・ミンチントン『うまくいっている人の考え方』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2013年。
		社会人基礎力診断についての事前説明	
5	10月23日	⑥	永松茂久『人は話し方が9割』すばる舎、2020年。
		アンゲームを用いた自己主張訓練	
6	10月30日	⑦	戸田久実『アンガーマネジメント』日本経済新聞出版（日経文庫）、2020年。
		社会人基礎力診断についての事前準備：「学生力診断」	
7	11月6日	⑧	池上彰『なんのために学ぶのか』SBクリエイティブ、2020年。
		⑨	梅田悟司『「言葉にできる」は武器になる』日本経済新聞出版、2016年。
8	11月20日	⑩	F太・小鳥遊『要領がよくないと思いついでいる人のための仕事術図鑑』サンクチュアリ社、2020年。
		社会人基礎力診断の結果を踏まえた面談方法について説明	
9	11月27日	⑪	佐々木圭一『伝え方が9割』ダイヤモンド社、2013年。
		⑫	加藤昌治『発想法の使い方』日本経済新聞出版（日経文庫）、2015年。
10	12月4日	⑬	亀井卓也『5Gビジネス』日本経済新聞出版（日経文庫）、2019年。
		⑭	前野雅弥『田中角栄のふろしき—首相秘書官の証言』日本経済出版社、2019年。
11	12月18日	⑮	松本秀男『できる大人のことばの選び方—一瞬で「信頼される人」になる！』青春出版社（青春新書）、2019年。
		⑯	武藤泰明『経営の基本』日本経済新聞出版（日経文庫）、1994年。
12	12月25日	⑰	永井孝尚『売ってはいけない—売らなくても儲かる仕組みを科学する』PHP 研究所（PHP 新書）、2019年。
		⑱	平本相武『五感で磨くコミュニケーション』日本経済新聞出版（日経文庫）、2006年。
13	1月8日	村越ゼミ2年生による2年間を振り返っての報告会（聴講および質疑）	
14	1月22日	短大共通セミナー「キャリアについて先輩から学ぶ会」	

3. 2021年度「ゼミナールA」における教育実践：「チームで働く力」の向上をめざす

(1) 授業目標

2年次の「ゼミナールA」では、1年次前期の「基礎ゼミナールA」と後期「基礎ゼミナールB」で向上したはずの「前に踏み出す力（Action）」と「考え抜く力（Thinking）」を前提として、「チームで働く力（Team Work）」を身につけることをめざした。「チームで働く力（Team Work）」を構成する6つの能力要素のうち、主に「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」と「規律性」の5つを高めることを目的とし、それぞれの能力を、さらにつきのようなプロセスで向上させることを想定した。共通の文献の内容をグループで報告する際の、読み原稿となる聴覚資料（MS-Word形式）と視覚資料（MS-Power Point形式）を作成する（「発信力」）。他者の報告やコメントを視聴することによって、自分の成長につながる気づきや意識の変化について説明する（「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」）。報告予定日までの段取りの決定とそのためスケジュールを守った準備、そして休まずに出席する（「規律性」）。このようなプロセスである。

1年次後期の「基礎ゼミナールB」では受講生個人が文献を選択してその紹介に取り組んだが、「ゼミナールA」ではグループで1冊の文献を選択して、グループでの報告に取り組ませた。具体的には、各グループで話し合い、自分たちが関心をもつ文献を選択させた。選択させた文献の要点について、グループのメンバーで協力しながら、読み原稿となる聴覚資料（MS-Word形式）と視覚資料（MS-Power Point形式）を作成したうえで、報告させた。文献選択から報告までの準備のプロセスと発表後のコメント提出までを含めて、「チームで働く力」のなかの「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」の5つの能力要素を高めることをめざした。聞き手にとって説得力のある読み原稿（聴覚資料）を作成して、他者を惹きつける魅力あるパワーポイント原稿（視覚資料）を作成することはプレゼンテーション力（「発信力」）を高める。メンバーと同じ文献を用いて報告までのプロセスを共有することによって“共に学ぶ”ことが実現されると考えた。そのような学習体験そのものが「チームで働く力」を高めるからである。

(2) 授業内容

2021年度「ゼミナールA」の第1回授業では、4つのグループを作るところから受講生自身に行かせた。それぞれのグループで関心もてる文献を選択し、報告予定日の持ち時間80分のなかでプレゼンテーションをすることを指示した。グループ活動なので、統括するリーダーと副リーダーの決定も受講生たちで選出させた。そしてグループ活動の意義を認識させるために活動報告書（MS-Word形式）を作成すること、その具体的な書き方、さらに活動報告書をMS-Teams上で毎回更新していくことなどについて説明した。

第2回授業日から第7回授業日まではそれぞれのグループによってプレゼンテーションまでの段取りや準備を進めてもらった。各グループは、授業時間外においてもプレゼンテーションの準備をする場合もあったので、それらの活動についてもMS-Teamsの活動報告書に記録させた。そして毎回、受講生によって更新されるMS-Teamsの活動報告書に基づいて、こちらから適宜、グループリーダーに指示やコメントをするような学習支援を行った。

城西大学水田記念図書館7階には学生が利用できるラーニングコモンズ（プレゼンテーションエリア）があるので、第8回授業日と第9回授業日にはプレゼンテーション本番前の練習会場としてそこを貸し切った。各グループはそのプレゼンテーションエリアで事前準備をすることで報告の時間配分や原稿の修正箇所などについての話し合いを進めた。

第10回授業日から第13回授業日には、それぞれのグループが、持ち時間80分を使って自分たちが作成したパワーポイント原稿を教室のスクリーンに映し出して、読み原稿を見ながらプレゼンテーションを行った。グループによるプレゼンテーションの内容は表2のとおりである。

表2 「ゼミナールA」におけるグループ別プレゼンテーションの概要

授業回	報告状況	報告文献および報告した節表題	PPT シート数
第10回 6月4日	第1班5人 中4人報告	安達智子『自分と社会からキャリアを考える』晃洋書房、2019年。 第1章 キャリア探索と自己効力 第2章 キャリア自己効力の情報源 第4章 キャリア意識 第6章 性別・ジェンダーと職業選択	86
第11回 6月11日	第2班5人 中4人報告	日本経済新聞社編・発行『そこまでやるか！あなたの隣のスゴイヤツ列伝』2006年。 第2章 あなたのココロ読んでみせます 第3章 わたしのカラダがモルモット 第4章 機械にできないワザを磨く 第8章 七転び八起きのだるま人生	69
第12回 6月18日	第3班4人 全員報告	小林俊一『ソニーを創った男 井深大』ワック、2012年。 第3章 電波に魅せられた少年 第9章 ソニーのスプリングボード 第10章 井深大のニューパラダイム	83
第13回 6月25日	第4班5人 全員報告	村上芽・渡辺珠子『SDGs入門』日本BP、2019年。 第1章 まずはSDGsを理解しよう 第2章 SDGsとビジネスはどう結び付いているのか 第3章 SDGsに取り組むときのヒント 第4章 SDGsにビジネスで貢献する 第5章 SDGsの取り組みテーマを選ぼう	58

グループによる報告時間は80分程度で、その報告後には受講者にコメント（600字程度）を、MS-Teams上につくったフォルダにアップロードさせた。こうすることで、報告したグループのメンバーが、聴講した受講生からのフィードバックを確認し、受講生全員が意見を共有できるように工夫した。

グループメンバーのなかには報告予定日に病欠などで報告できない場合があったので、第14回と第15回授業日にはそれらの受講生に報告してもらった。また城西大学への編入を希望する学生が個別に準備した文献紹介のプレゼンテーションの機会にもなった。

4. 2021年度「ゼミナールB」における教育実践：3つの能力による総合的实践

（1）授業目標

グループワークによる共働によって、社会人基礎力の12の能力要素のうち、「ストレスコントロール力」を除く11の能力要素をバランスよく高めることをめざした。3つのグループに分かれた受講生は、企画テーマの選択にはじまり企画に必要なプレゼンテーション作品を完成させるまでのプロセスにおけるそれぞれの役割を担うことによって自ら「主体性」を高め、「実行力」、「働きかけ力」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「傾聴力」を高めることをめざした。そしてグループワークのなかで起こりうる問題や課題の解決において、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」を高めていくことをめざしたのである。

（2）授業内容

2021年度後期の「ゼミナールB」では、受講生が3つのグループに分かれ、そのグループで受講生全員が参加できる楽しいイベントを2つ企画・立案し、持ち時間80分を用いて2つのイベントを実行させた。第1回授業から第5回授業までを受講生による準備期間とした。受講生が授業時間外において準備のための話し合いなどをした場合には、MS-Teams上に置いた活動報告書（書式は「ゼミナールA」における活動報告書と同様）に記載してもらった。

各グループによるイベントの概要は表3のとおりである。1班のゲーム1回目では、文献『15分でチームワークを高めるゲーム39』⁹を参考にしながら、1つのゲームを約15分で手際よく誘導して参加者を楽しませていた。ゲームに必要な小道具はすべてグループメンバーで協力して手づくりしたものであった。1班のゲーム2回目には、3班のグループリーダーも協力して、キャンパス内で撮影された10枚の写真を巡るという「キャンパスツアー」と、商品としてお菓子も準備されたお楽しみ抽選会を行った。この1班のゲーム企画にはゼミナールの1年生を招待したところ、参加した1年生たちから大好評であった。2班によるクイズ1回目とクイズ2回目では、それぞれがテーマを決めてクイズ内容を選択して、皆が興味をもてるような質問シート、回答者への選択肢シート、わかりやすい解説のためのイラストや写真のある正答シート

(いずれも MS-Power Point 形式) を用意した。全員が前に並んで順番に質問をしていき、聴講する学生たちが和むような話し方、ときには笑いをそそるような楽しい雰囲気づくりをしていた。3 班では企画の準備期間に欠席するメンバーが多かったためグループワークに難航し、1 回目プレゼン日にはグループリーダーが一人で「特撮の面白さ」について 70 分程度の報告を行った。特撮の時系列の変化や特徴を示すパワーポイント原稿を用いた解説だけではなく、当時放映されたウルトラマン作品(動画)の一部を視聴させながら名場面の特徴と放映当時の社会問題との関係などについて解説した。3 班による 2 回目プレゼン日には、グループメンバー全員が作成したパワーポイント原稿を用いて一人 15 分程度の報告を行った。報告後には聴講した受講生たちにコメントの発表をしてもらったところ、5 人のプレゼン内容のなかで自分の興味や関心をそそったシートを具体的にとりあげてそれぞれ作品の長所や魅力を述べていた。

表 3 「ゼミナール B」における受講生によるイベントの詳細

班	人数	実施日	企画概要	企画詳細
1 班	6 人	11月26日	ゲーム 1 回目	チームワークを高めるゲームとして、①「噂を書き合い、だれがそれを書いたのかを当てるゲーム」、②「ひと言ずつ言葉をつなぎ、全員でストーリーをつくっていくゲーム」、③「額につけたラベルどおりにお互いを扱うゲーム」、④「目をつむって、指示通りに紙を折っていくゲーム」、⑤「自分の番号を指示されたときに他の番号を反射的に答えるゲーム」、⑥「ワードウルフ」を行った。
		12月10日	ゲーム 2 回目	キャンパス内で撮影された 10 枚の写真を巡る「キャンパスツアー」を行った後、教室に戻って「お楽しみ抽選会」を行った。
2 班	7 人	12月 3 日	クイズ 1 回目	作成した視覚資料 (MS-Power Point 形式) を用いて、30 題のクイズについて受講生に回答してもらい、正答について詳しく説明した。
		12月17日	クイズ 2 回目	作成した視覚資料 (MS-Power Point 形式) を用いて、40 題のクイズについて受講生に回答してもらい、正答について詳しく説明した。
3 班	6 人	11月12日	自分の好きなことについてのプレゼン 1 回目	<ul style="list-style-type: none"> ・「特撮の面白さ」について報告した。 (報告後には聴講者全員がコメントを発表した。)
		12月24日	自分の好きなことについてのプレゼン 2 回目	視覚資料 (MS-Power Point 形式) を用いた報告 <ul style="list-style-type: none"> ・「アイドルについて」 ・「親友とバイトの先輩について」 ・「趣味としてのゲームについて」 ・「自分の将来の夢 (パティシエ) について」 ・「埼玉西武ライオンズ、旅行、写真」 (報告後には聴講者全員がコメントを発表した。)

2021年度の「ゼミナールB」では、学内における受講生による企画の実施の他に、授業回数4回分として小川町における学外授業を行った。これは受講生のチームワークを高めながら、城西大学・城西短期大学を取り巻く地域の文化や歴史、産業を理解することを目標としている。この学外授業は筆者が小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループ（主幹保田義治氏）と連携して実施した⁶。「和紙のふるさと」として有名な小川町には和紙体験学習センターがある。ここは本格的な手漉き和紙製作技術を学ぶことができる施設で、楮だけを使用した「細川紙」の製造技術を学ぶために全国から技術者が集まって研修がおこなわれる場所でもある。和紙体験学習センターで受講生が紙漉き体験をするためには、新型コロナウイルス感染症対策として、19人の受講生を2つのグループに分けて活動をすることで実施可能であるとの連絡をいただいた。日程調整の結果、学外授業実施日を11月1日（月）とした。小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループから提案された具体的な内容が表4に示されている。

この提案には、和紙体験学習センターで「紙漉き体験」ができるだけでなく、「（和紙の）折り染め体験」と「（楮の）カズヒキ体験」が加えられているのが特徴である。表4のなかの「町歩き」とは、小川町観光協会が実施している「おがわまちなか散歩ツアー」におけるボランティアで観光案内をしてくださる観光案内人によるツアーのことである。この学外授業では受講生を2つのグループに分けて、それぞれ2時間コースをお願いした。表4のなかの「かどや」とは、昼食場所とした小川町中心街にある割烹料理店「割烹角屋」のことである。

この提案（表4）をもとに、本学定例教授会（10月15日実施）で学外授業の実施計画を説明し、11月1日（月）の午前10時から午後4時までの学外授業を実施することが了承された。そのため、表4に示された教材などの必要経費および昼食代は授業の運営経費に含まれている。

学外授業実施日には受講生全員が参加し、小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループの提案どおりに無事全行程を終えることができた。写真①および写真②にみられるように、受講生それぞれが漉いた和紙と折り染め作品を当日持ち帰ることができた。

写真① 和紙体験学習センターでの集合写真



栃本堰	島村発祥地
南裏通り	栃本堰
田中屋長屋	街道のにぎわい
旧玉成舎	晴雲酒造
馬橋（槻川の流れ）	栃本観音堂
子育て呑龍	比企銀行
庚申塔	福助
和紙工	二葉
聖徳太子	石蔵
センター 着	駅前（むすびめ）着

費用

体験 1500円（5枚）×4セット＝6000円

（郵送になります。郵送料510円）

折り染め 紙代としてA4サイズ20枚 1500円×2セット＝3000円

送料 510円

その他 カズヒキ作業（前回のカズむきに変わる作業で無料）

担当：にぎわい創出課 和紙普及宣伝グループ主幹 保田義治

写真② 折り染め作品を手にする受講生



5. 受講生の学習成果についての検討

（1）社会人基礎力診断

城西大学の2020年度学長所管研究奨励金に基づく研究「ディプロマ・ポリシーから逆算して設計した初年次教育の効果に関する研究」に短大から教員が3人参加した。研究の一環として社会人基礎力診断が各ゼミナールにおいて実施された。ここで検討するのはその診断結果である。ゼミナール受講者が診断を受ける前に、3人の教員は日経 Human Resources（HR）の「社会人基礎力診断S」を受け、診断方法や診断結果の開示方法や開示内容を理解した。

「基礎ゼミナールB」の第4回授業日（10月16日）に、受講生に対して「社会人基礎力診断S」についての事前説明を行った（表1）。この診断は研究目的を兼ねるものであるが、受講生の学習成果を把握して学習支援をすることを目的としていることを丁寧に説明した。筆者自身の「社会人基礎力診断結果レポート」（PDF形式）を受講生に開示して診断項目である12の能力要素について丁寧に説明した⁷。これらにより、この社会人基礎力の診断結果を個人が特定されない形で発表する事について受講生から了解を得ている。また第6回授業日の10月30日には、「学生力診断」に回答させることで、社会人基礎力診断についての関心を高められるように配慮した⁸。

1年次の基礎ゼミナールの受講生を対象とした第1回社会人基礎力診断（「社会人基礎力診断S」）は2020年11月16日から11月20日の期間に行われた。村越ゼミナールの受講生は自宅においてオンライン形式で受験した。11月21日に診断結果一覧（Excel形式）と受験者に対する個別の「診断結果レポート」（PDF形式）をオンライン上で受け取った。

受講生に対する個別の「診断結果レポート」では、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」と「チームで働く力」という3つの能力それぞれが、12の能力要素に分けられ数値化され、それらの単純平均が各能力の点数とされ、さらに3つの能力の単純平均が「合計点」として表されている。

社会人基礎力診断結果として3つの能力や12の能力要素の点数が提示されただけでは、受講生が具体的に何をすれば点数の低い能力を上げることができるのかを理解することは難しいと考え、面談することにした。1年次後期の「基礎ゼミナールB」の第8回授業（11月20日）で面談実施のアナウンスをしたところ（表1）、希望者は受講生19人中13人であった。この13人を対象に11月21日と11月23日の2日に分けてオンライン面談（1人30分程度）を行った。面談では、まず点数の高い項目を注目させ、自分の長所として意識させて自己肯定感を高めることに努めた。そのうえで12の能力要素のなかでとくに点数の低い項目を取り上げ、自らが考える、点数が低い理由を説明してもらった。具体的な項目は、受講生の多くが70点以下であった「前に踏み出す力」のなかの「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」である。何が低い点数の原因なのか、何をすれば点数が上がるのかなどについてディスカッションを行った。そのうえで、社会人基礎力は、他者と関わって実際にさまざまな体験・経験を積んでいくことによって点数を上げることが可能であることを説明した。このような面談をとおして、「前に踏み出」せるきっかけを受講者がつかめるよう、取り組んだ。

2021年度の受講生（中途退学者1人を除く18人）が、2年次終了間近の2022年1月14日から1月22日の間に、第2回社会人基礎力診断を受けた。この診断結果と、1年次のものとを比較し、社会人基礎力の3つの能力の向上がみられたか検討する。具体的には、「社会人基礎力診断S」の「診断結果レポート」のうち、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」という3つの能力の点数と、それらの「合計点」（平均点）をとりあげる。

対象となる演習科目の受講生 18 人の点数変化を散布図により示す。社会人基礎力診断の「前に踏み出す力」については図 1、「考え抜く力」については図 2、「チームで働く力」については図 3、そして 3 つの能力の「合計点」(平均点)については図 4 に示されている。グラフの横軸が 1 年次後期の「基礎ゼミナール B」で実施した「第 1 回社会人基礎力診断」の点数、縦軸が 2 年次後期の「ゼミナール B」で実施した「第 2 回社会人基礎力診断」の点数である。したがって、おおよそ 1 年次後期の終わりから 2 年次後期の終わりにおける 2 時点の学習成果をみることになる。

45 度線上にあるデータは第 1 回の点数と第 2 回の点数が同じである。45 度線よりも右側にあるデータは第 1 回の点数より第 2 回の点数が低く、左側にあるデータは反対に第 2 回の点数の方が高い。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」と「チームで働く力」と、それらの「合計点」(平均点)のいずれにおいても、45 度線の右側にあるデータはわずかであり、ほとんどは左側にある。つまり、いずれの能力の点数も第 1 回から第 2 回に上昇したということである。図 1 から図 4 までの散布図において破線で囲った範囲には、点数が 10 以上、上昇した者が含まれている。「前に踏み出す力」を示した図 1 では、楕円のなかに 10 人が含まれ、なかでも J (46→83) と M (48→83) は驚異的な上昇を示している。「考え抜く力」を示した図 2 でも 10 人が含まれ、なかでも M (73→96) と P (69→88) はかなり上昇している。「チームで働く力」を示した図 3 では 11 人が含まれ、なかでも J (65→86) と L (63→81) はかなり上昇している。「合計点」(平均点)を示した図 4 でも 10 人が含まれている。これらのことから、受講生のほとんどが第 2 回診断で社会人基礎力の 3 つの能力の点数を上げることができたとみなすことができる。これらのことから、2 年次のゼミナール教育において「チームで働く力」の向上をめざし、総合的実践に取り組んだところ、結果的には「チームで働く力」を高めただけでなく、「前に踏み出す力」と「考え抜く力」の両方を向上させることができていた。

図1 社会人基礎力「前に踏み出す力」の散布図

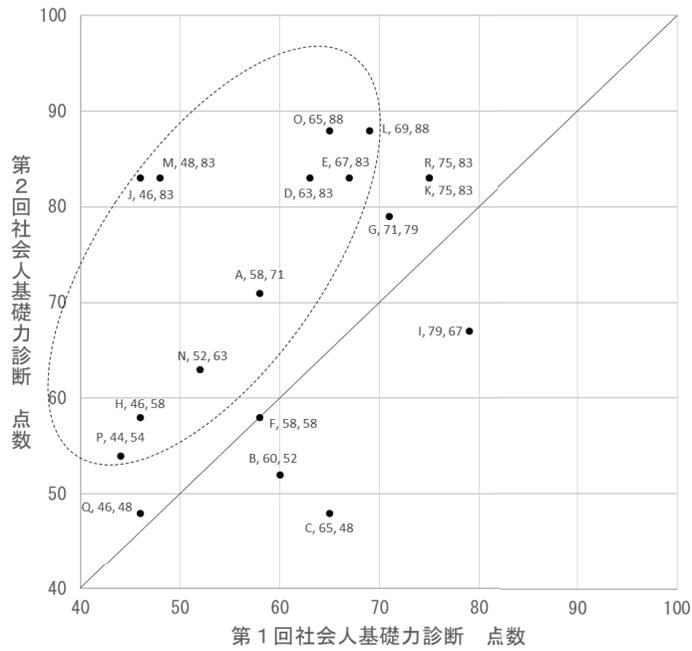


図2 社会人基礎力「考え抜く力」の散布図

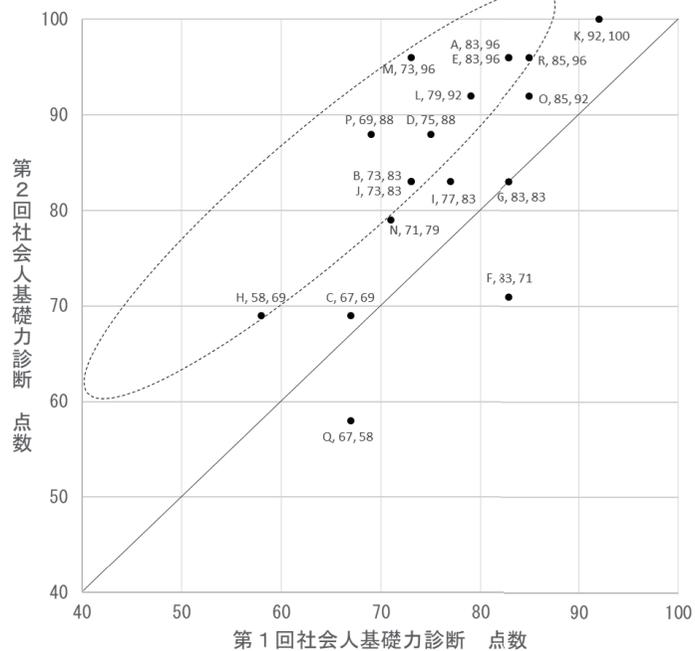


図3 社会人基礎力「チームで働く力」の散布図

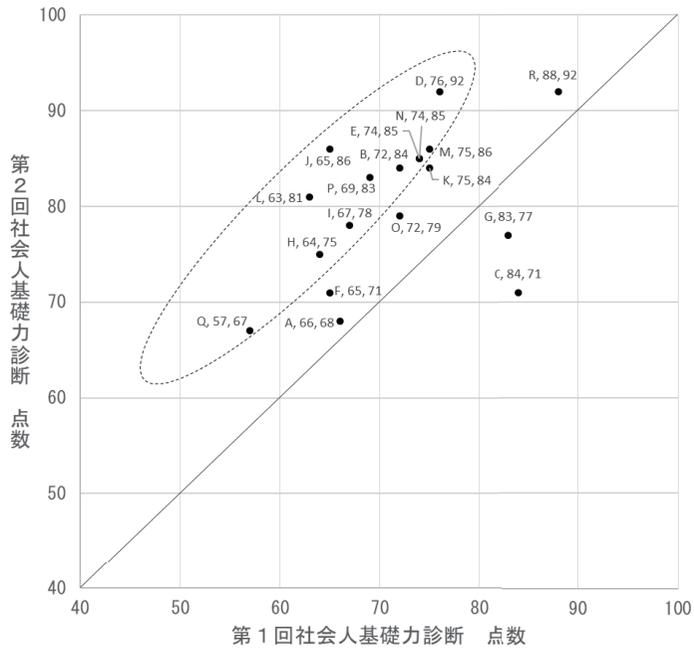
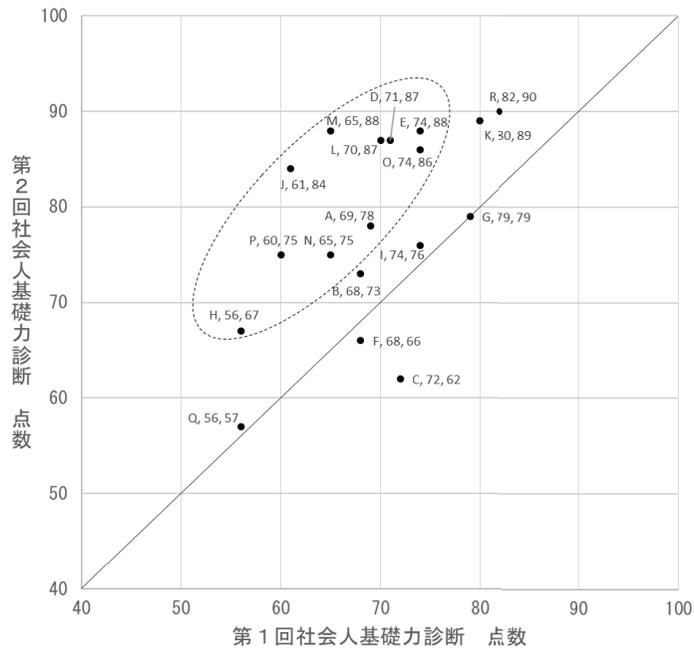


図4 社会人基礎力3つの能力の「合計点」の散布図



(2) 授業アンケートにみる受講生による授業評価

城西短期大学では Web Class システムを用いて 2022 年 1 月 7 日から 1 月 24 日までの期間に「2021 年度授業アンケート後期」が実施された。筆者の担当した「ゼミナール B」の受講生のうち 15 人が回答した。この授業アンケート結果は各担当教員のみに表示されたので、筆者は数値化された部分と自由記述部分を PDF 化して MS-Teams のゼミ用チームにアップロードして掲載した。

この授業アンケートには設問 1 から設問 11 までである。表 5 は設問 1 から設問 10 の設問内容とその回答をまとめたものである。

表 5 「授業アンケート」の結果

設問	回答数 15	ア. そう思う	イ. ややそう思う	ウ. あまりそう思わない	エ. そう思わない
1. テキスト・プリントなどの教材はわかりやすい。	11 (73.3%)	4 (26.7%)			
2. 授業のスピードはちょうどよい。	9 (60.0%)	5 (33.3%)	1 (6.7%)		
3. 一回ごとの授業の分量はちょうどよい。	8 (53.3%)	6 (40.0%)	1 (6.7%)		
4. 話し方は明瞭で聞き取りやすい。	10 (66.7%)	4 (26.7%)	1 (6.7%)		
5. 学生の質問に丁寧に答えてくれる。	9 (60.0%)	5 (33.3%)	1 (6.7%)		
6. 板書や視覚教材は見やすい。	13 (86.7%)	2 (13.3%)			
7. 遅刻・欠席をしていない。	11 (73.3%)	3 (20.0%)			1 (6.7%)
8. わからないことは先生に質問している。	8 (53.3%)	6 (40.0%)			1 (6.7%)
9. 予習または復習をして授業に出席している。*	1 (6.7%)			7 (46.7%)	7 (46.7%)
10. 現時点で、この授業に満足している。	6 (40.0%)	9 (60.0%)			

(注) ※設問 9 だけは選択肢が「ア. 3 時間以上、イ. 2~3 時間、ウ. 1~2 時間、エ. 1 時間未満」である。

すべての設問の中で、とくに設問 6 「板書や視覚教材は見やすい」で「そう思う」の回答率が 86.7% と高い。「ゼミナール B」の教材は学生が作成した視覚資料 (MS-Power Point 形式) であることから、受講生は仲間が作成した視覚教材がとても見やすいと評価したと考えられる。また、設問 10 の回答から、この授業にほとんどの受講生がほぼ満足していることがわかる。

設問 11 は自由記述形式で受講生の「ゼミナール B」に対する希望を尋ねるもので、アンケートに回答した 15 人のうち 7 人による記載があった。表 6 には筆者が担当した「ゼミナール B」に対する 7 人の自由記述内容が示されている。

表6 筆者担当「ゼミナールB」に対する受講生による自由記述内容

後期の授業内容は1年と2年前期と違い、班ごとの企画でとても楽しいものでした。2年間を通して、一貫性のある授業内容のため、自分にとって成長できたと感じています。ありがとうございました。
このゼミのおかげでパワーポイントなどが使えるようになったり、プレゼンができるようになったりと社会に出たときに必要とされる力がとても身につきました。2年間ありがとうございました。
2年間お世話になりました。本当に私生活でも助けて頂きありがとうございました。
2年間ありがとうございました。
合同ゼミで思い出を作りたいかったです。
特になし
特になし

この授業アンケートは「ゼミナールB」に対する評価である。自由記述をみると「2年間」のゼミナール教育をふり返っている。2年次の「ゼミナールB」では、社会人基礎力の3つの能力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）を高めるための総合的実践を行った。受講生にとってそれは「とても楽しいもの」であったことが確認できた。オンライン面談や文献に関する質問や相談へのメール対応、MS-Teamsのチャット機能を用いた丁寧な対応、必要に応じて授業時間外におこなった文章の添削や個別指導のなかで、学生が直面する様々な問題に気づく機会が多かった。それらの頻繁な関わりがあった学生のなかの数人が感謝の言葉を述べていると思われる。

6. おわりに

本学ビジネス総合学科のディプロマ・ポリシーである、社会人基礎力（「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」）の向上を、短期大学のカリキュラムの中核にあるゼミナールという2年間にわたる演習科目においてめざした。1年次前期の「基礎ゼミナールA」では個人の「前に踏み出す力」の向上、1年次後期の「基礎ゼミナールB」では個人の「考え抜く力」の向上、そして2年次前期の「ゼミナールA」では「チームで働く力」の向上をめざした。さらに2年次後期の「ゼミナールB」では3つの能力による総合的実践を行った。

これらの学習成果として、1年次末の社会人基礎力診断結果と2年次末のものを比較したところ、ほとんどの受講生が社会人基礎力の3つの能力を高めていた。また、授業アンケート結果によると、受講生のほとんどがゼミナール教育（とくに「ゼミナールB」）に満足していることを確認した。社会人基礎力の向上を確認できることが自分の成長を確認することにつながり、自分の人間的な成長が確認できるからこそゼミナール教育に満足と評価したと推測できる。社会人基礎力が向上したのはゼミナール教育だけの成果とはいえないが、本学ビジネス総合学科の

カリキュラム全体の教育効果を上げるうえで貢献できたと考えている。社会人基礎力の向上に効果があるのは学内の教育効果だけではなく、学外の活動の有無などの影響もあろう。来年度は全学的な集計結果に基づいた検討を試みたいと考えている。

受講生のクラス分けは現状では苗字の 50 音順による振り分けなのでランダムである。入学時に社会人基礎力診断を実施して、12 の能力要素の診断結果をふまえてクラス分けをするなどにより、社会人基礎力の向上にむけた学習支援方法を効率的に行うことができるはずである。そのためにはいっそう社会人基礎力を効果的に向上させられる教授法を検討する必要がある。また、このたびの社会人基礎力診断結果の分析では、ごくわずかではあるが社会人基礎力の低下または変化がみられなかった受講生がいたことも事実である。このような現象がおこる理由についても検証する必要があるだろう。これらは今後の課題としたい。

注

- 1 2016年の中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』を受け、小学校から高等学校までの学習指導要領が改訂され、順次実施に移されている。これに伴い、小学校から高等学校まで一貫したキャリア教育が実現されつつある（菅原良、ほか編著『キャリア形成支援の方法論と実践』東北大学出版会、2017年、25-30頁を参照）。最近の4年制大学におけるキャリア教育の取り組みについては、永作稔・三保紀裕編『大学におけるキャリア教育とは何か』（ナカニシヤ出版、2019年）を参照。高等学校と大学との接続に関する基本情報は、文部科学省『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』（平成24年8月28日中央教育審議会）の「7. 質的転換に向けた更なる課題」のなかの「高等教育と初等中等教育の接続についての課題」（18-19頁）
<https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf>を参照。
また、文部科学省「資料4-4 論点に関する過去の中央教育審議会等の答申（抜粋）」
<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/attach/1342749.htm>を参照。
- 2 経済産業省「社会人基礎力」<<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>>を参照。
- 3 経済産業省「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」（人材力研究会）報告書（平成30年3月）、26-29頁<https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf>、および、経済産業省産業人材政策室「人生100年時代の社会人基礎力について」<https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf>を参照。「人生100年時代の社会人基礎力」の英訳については、経済産業省パンフレット<<https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/Ecforthe100-yearlife.pdf>>を参照。
- 4 城西短期大学『学生便覧2021』pp.74-75、を参照。城西短期大学にはビジネス総合学科としてのディプロマ・ポリシーとは別に、短期大学としてのディプロマ・ポリシーもある。短期大学としてのディプロマ・ポリシーは以下の3つである。①広い教養と、深い専門的な知識や技能を備え、地域社会や国際社会で活躍できる能力、②社会人として適切にふるまうことができる思考力、判断力、表現力や道徳的能力、③社会の多様性に配慮して主体的かつ協同的に実社会で貢献できる能力、である。

-
- 5 ブライアン・コール・ミラー（富樫奈美子翻訳）『15分でチームワークを高めるゲーム 39』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015年。
 - 6 筆者は、2017年度から城西短期大学の留学生を対象とした集中講義科目「日本文化研修」を担当しており、小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループと連携して学外授業を行ってきた。その経緯や詳細については以下の論文に詳しくのべられている。村越純子「小川町にぎわい創出課との連携による地域教育—留学生対象「日本文化研修Ⅰ」における学外授業—」『地域と大学 城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』第1号、2021年3月、pp.28-38。
< https://libir.josai.ac.jp/il/user_contents/02/G0000284repository/pdf/JOS-24362336-0106.pdf >
 - 7 筆者の社会人基礎力診断結果レポートでは、「前に踏み出す力」は75点、「考え抜く力」は100点、「チームで働く力」は96点で、それらの「平均点」は90点であった。同レポートでは「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の全国平均はいずれも70点と表示されていた。
 - 8 ここで用いた「学生力診断」の資料は、日経 HR 編集部『大学1、2年生の間にやっておきたいこと 学就 BOOK 【改訂第4版】』（日経 HR、2017年、pp.58-59）所収のものであり、それを複写して受講生に回答してもらった。